2026 年度　大学院入学試験（留学生　春季募集）

花園大学大学院文学研究科　博士後期課程（仏教学専攻）

入学試験問題（留学生・日本語）

問題文　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

宗助は一封の紹介状を懐にして山門を入った。……（中略）……

宗助は一見こだわりの無さそうなこれらの人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、その懸隔の甚だしいのに驚ろいた。そんな気楽な身分だから坐禅ができるのか、あるいは坐禅をした結果そういう気楽な心になれるのか迷った。

「気楽ではいけません。道楽にできるものなら、二十年も三十年もうんすいをして苦しむものはありません」と宜道は云った。

彼は坐禅をするときの一般の心得や、老師から公案の出る事や、その公案に一生懸命噛りついて、朝も晩も昼も夜も噛りつづけに噛らなくてはいけない事やら、すべて今の宗助には心元なく見える助言を与えた末、

「御室へ御案内しましょう」と云って立ち上がった。

……（中略）……

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段を上って、その正面にある大きな伽藍のやねを仰いだまま直左りへ切れた。玄関へ差しかかった時、宜道は「ちょっと失礼します」と云って、自分だけ裏口の方へ回ったが、やがて奥から出て来て、「さあどうぞ」と案内をして、老師のいる所へ伴れて行った。

老師というのは五十格好に見えた。赭黒い光沢のある顔をしていた。その皮膚もきんにくもことごとく緊って、どこにも怠のないところが、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫りつけた。ただ唇があまり厚過ぎるので、そこに幾分の弛みが見えた。その代り彼の眼には、普通の人間にとうてい見るべからざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めてその視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思があった。

「まあ何から入っても同じであるが」と老師は宗助に向って云った。「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えて見たら善かろう」

宗助には父母未生以前という意味がよく分らなかったが、何しろ自分と云うものは必竟

何物だか、その本体を捕まえて見ろと云う意味だろうと判断した。それより以上口を利くには、余り禅というものの知識に乏しかったので、黙ってまた宜道に伴れられて一窓庵へ帰って来た。

……（中略）……

彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教えられた通り座蒲団の上に半跏を組んだ。昼のうちはさまでとは思わなかった室が、日が落ちてから急に寒くなった。彼は坐りながら、背中のぞくぞくするほど温度の低い空気に堪えなかった。

彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の実質も、ほとんど捕まえようのない（　イ　）なものであった。彼は考えながら、自分は非常に迂濶な真似をしているのではなかろうかと疑った。火事見舞に行く間際に、細かい地図を出して、仔細に町名や番地を調べているよりも、ずっと飛び離れた見当違の所作を演じているごとく感じた。

彼の頭の中をいろいろなものが流れた。そのあるものは明らかに眼に見えた。あるものは混沌として雲のごとくに動いた。どこから来てどこへ行くとも分らなかった。ただ先のものが消える、すぐ後から次のものが現われた。そうして（　　ロ　　）にそれからそれへと続いた。頭の往来を通るものは、無限で無数で無尽蔵で、けっして宗助の命令によって、留まる事も休む事もなかった。断ち切ろうと思えば思うほど、滾々として湧いて出た。

……（中略）……

宗助はこの間の公案に対して、自分だけの解答は準備していた。けれども、それははなはだ（　　ハ　　）薄手のものに過ぎなかった。室中に入る以上は、何かけんげを呈しない訳に行かないので、やむを得ず納まらないところを、わざと納まったように取繕った、その場限りの挨拶であった。彼はこの心細い解答で、僥倖にも難関を通過して見たいなどとは、夢にも思い設けなかった。老師をごまかす気は無論なかった。その時の宗助はもう少し真面目であったのである。単に頭から割り出した、あたかも画にかいた餅のような代物を持って、義理にも室中に入らなければならない自分の空虚な事を恥じたのである。

……（中略）……

室中に入るものは老師に向って三拝するのが礼であった。宗助は敷居際に跪ずいて形のごとく拝を行なった。すると座敷の中で、「一拝で宜しい」と云う会釈があった。宗助はあとを略して中へ入った。

室の中はただ薄暗い灯に照らされていた。この静かな判然しない灯火の力で、宗助は自分

を去る四五尺の正面に、鋳物のように動かぬ老師の姿を認めた。彼は全身に渋に似た柿に似た茶に似た色の法衣を纏っていた。足も手も見えなかった。ただ頸から上が見えた。その頸から上が、（　ニ　）と緊張の極度に安んじて、いつまで経っても変る恐を有せざるごとくに人を魅した。そうして頭には一本の毛もなかった。

この面前にきりょくなく坐った宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もっと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」とたちまち云われた。「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

宗助は（　ホ　）のごとく室中を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

＊夏目漱石『門』（青空文庫所収）より抜粋し、出題の都合上、必要最小限の改変を施した。

設問　（留学生・日本語）

以下の設問１から５に答えなさい。

1. 次の語の読み仮名を答えなさい。(2×5)

気楽　　迂闊　　無尽蔵　　僥倖　　代物

2. 次の語の漢字を表記しなさい。(2×5)

うんすい　　やね　　きんにく　　けんげ　　きりょく

3. 文中の（　　）に入る最も適切な語を、以下の選択肢から一つ選びなさい。(2×5)

（イ）　A. 空白　　B. 空疎　　C. 空漠　　D. 空前

（ロ）　A. 偶然　　B. 唐突　　C. 恣意的　　D. 仕切りなし

（ハ）　A. 粗雑　　B. 杜撰　　C. 覚束ない　　D. 浅薄

（ニ）　A. 厳格　　B. 厳粛　　C. 厳正　　D. 厳明

（ホ）　A. 猫の額　　B. 馬の骨　　C. 喪家の犬　　D. 虎の威を借る狐

4. 宗助は老師からどのような公案を与えられたか。また、その公案に直面した宗助の心理状態が、本文中でどのように描写されているかを、簡潔に要約しなさい。(10×1)

5. 老師が宗助の解答に対して「もっと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」と述べた。その「ぎろりとしたところ」とは、宗助の解答のどの点が欠けていることを指すと考えられるか。本文の内容を踏まえて説明しなさい。(10×1)